

第一人称の権威と〈頭の中にある意味〉

氏名 小川祐輔 (Ogawa Yusuke)

所属 筑波大学大学院

私たちが自分の考えや信念、欲求、意図、疑念等々といったもの、つまり（いわゆる）命題的態度について誠実に報告するとき、そこには独特の権威が宿る。もう少し詳しくいえば、この種の報告は客観的な証拠に基づいてなされるわけではないにもかかわらず、通常、その内容については報告者自身が一番よく知っており、それゆえ他者からの疑いや訂正の余地がないとされるのである。この種の報告がもつ以上のような特徴は、第一人称の権威（first person authority）と呼ばれている。

この第一人称の権威の存在は、私たちの言語実践についての疑いようもない事実であるように思われる。しかし、H. パトナムが「意味」の意味について」という論文を発表したのを一つの契機として、第一人称の権威の存在を疑う、あるいは否定する議論が提出されてきた。

パトナムは、上記論文のなかで、私たちが使う言葉の意味は周囲の環境等の外的要因によって（少なくとも部分的に）決定されているという「意味の外部主義（externalism of meaning）」を打ち立て、それを「「意味」そのものは頭の中にはない！（“meaning” just ain't in the head!）」と印象的に表現した。そして一部の哲学者たちは、この結論を、第一人称の権威を脅かすものと解釈する。つまり、ある人が自分の命題的態度を報告するとき、そこで使われている言葉の意味を決める外的要因について報告者以上によく知っている聞き手がいたとしたら、その聞き手の方が、報告者自身よりも、報告者の命題的態度の内容をよく知っていることになる、というわけである。

筆者は、意味の外在主義は説得的だと考えている。しかし同時に、私たちの言語実践に第一人称の権威が存在するのはあきらかだと考えてもいる。ではこの二つは両立させられないのだろうか。ちょうどこのような見地から外部主義と第一人称の権威を両立させようとしているのが、D. デイヴィドソンである。

デイヴィドソンが打ち立てた論点は、大きく二つに分けることができる。一つ目は、報告者の報告を解釈するさいに発揮せねばならない善意（charity）の観点から第一人称の権威を擁護しようとするものである。そして二つ目は、（パトナムに反して）意味が頭の中にあることを示すために、意味の外在主義と、意味は脳状態によって実現されているという考えを調停させようとするものである。私は、デイヴィドソンの一つ目の論点は（基本的に）支持したいが、二つ目の論点には懐疑的である。そもそも、第一人称の権威の存在を

擁護することと、意味を頭の中に位置づけることとのあいだになにか関係があるのだろうか。

以上を踏まえ、本稿では、このデイヴィドソンの一連の応答に焦点を当て、その妥当性を探っていくこととする。本稿での議論を通して、デイヴィドソンの一つ目の論点を適切に展開すればパトナムらへの応答としては十分であり、彼の二つ目の論点は余計であるどころが問題があるということを示したい。